

三月十四日(月)

〈人間健康学部 健康栄養学科〉

平成二十八年度 金沢学院大学 入学試験問題（一般入試Ⅲ期）

国語

（注意事項）

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから12ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのには法律で禁じられています。

（解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10

と表示のある問いに対して

④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄									
10	①	②	③	●	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

問題は、次のページからです。

第1問 次の文章は、文章を書くことを学生に教える講義の形式で書かれた文章である。この文章を読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。

もう一つ。美の問題、ということがあります。どういうことかというのと、皆さんは文章を書く。で、いい文章を書きたいと思う。でもいい文章、ってなんだろう。誰にでも賛成される客観的な名文、いい文章ってあるんだろうか。その目安、^①コンキョはあるんだろうか。いい文章を書きたいと思うことには、ちゃんとした理由があるんだろうか。そういう問題です。

書くってというのは考えることなんだ。僕は^{ぼく}こう言う。すると、だったら、誰もが自分なりに考えるんだから、その人なりに努力するんだから、それぞれにそれはいい文章なんじゃないだろうか。こういう考え方も出てきます。ですから、さらに一歩進んで、そういうものに点数をつけることって、^②ゲンミツにいうとできないんじゃないだろうか、そういう考え方も出てくるわけです。以前こういうことがありました。

皆さんはこれから経験することになりますけれども、僕は皆さんの文章に評点をつけます。これはいい！とびっくりマークがつく場合は「○a」、いいという時は「a」、まあいい、は「○b」、ウーン、まあ、許そうか、これが「b」。あと、不満はあるが……が、「c」。「d」というのは、あまりないけれども、ダメ。

まあ、これはその時の僕の気分で大いぶ変動もするんですが。とにかく、点数をつける。で、一人の熱心な学生が^③コウレイの毎回書いてもらう感想に、先生、点数をつけるのは、やめたほうがいいんじゃないだろうか。何か評点がつくと、この授業らしくない気がする、と書いてきた。僕は以前、別の授業で試験をやった時に、ある人のやり方を例に引いて、自分で点数をつけてみよ、なんていうことをやったこともあったので、この意見には大いぶ考えました。しかし、その結論は、やはり自分は評点をつける、というものでした。次の時間にその意見を探り上げ、なぜ僕が評点をつけるか、話したのです。

^④僕は断固として点数をつける。僕としても、^④テンサクして、評点をつけないですむならばその方が楽です。しかし、実際考えてみると、評点をつけない、というのは、ありえない。なぜなら、僕は自分から見て、いい文章、よくない文章、というものをもっている。もっていなかったらどうしてこんな授業が成り立つだろう。僕は、こういう文はいいと思う、こういう文はよくないと思う。そういうことがなければ、少なくとも批評は存在できない。いや、ほんと言うと批評だけじゃなくて、文章を書くことに熱意を注ぐ、ということが存在できなくなってしまう。その熱意が、大きく言って美というものを成り立たせているからです。いいですか。いろいろあるよ、とやっていたら、美も存在できなくなるんです。

美、って何ですか。誰もがいい、と思うものです。あ、美しい！というのは、自分は美しいと思う、というんじゃないんです。これは、きっと他の人も美しく思うに違いない、そういう感情なんです。他の人も自分同様、美しいと思うはずだ、と、これが美の感情なんです。

批評というものがある。たとえば僕はある本を読んで感動する。あるいは、うーん、もう一つ、と不満に思うとする。で、その思ったこと、感じたことをどれだけ「うまく」言い当てられるか、そこから書かれる僕の文章というのは、そういう目標との関係で、うまく書けた、だめだった、という感想を僕に生むことになります。

それは、客観的な基準じゃないかもしれない。でも、いいですか。僕はこう思うんです。僕は感動する。うん、いい、これは僕がいい、と感じるんだから誰もが——まともだったら——いい、と感じるはずだ、と。僕はいんだけど、他の人はどうか知らない、というようには、人はあるものを、いい、とは思えないんです。(イ)いい、というのには、すでに他人が入っているんです。他の人はどうか知らない、でも、自分の楽しみだからいいんだ、そんなのは、嘘。逃げています。自分のいい、という感情が他の人間から、たとえば僕から否定されるのをおそれている。でも、僕の判断だって正しいかどうかはわからない。それはそうなんです。でも、じゃあ、どうやってそれが正しいか、間違っているか、調べるのか。金なら物質だから、それが本物か偽物か、調べられます。でも、美、というのは、調べられない。客観的な基準なんてものはない。しかし、客観的な基準があるはずだ、という一人一人の情熱、確信、がある。自分はいいい、と思う。これって絶対だ、誰だってまともならそう思うぜつ、たとえばいい音楽ってというのは、そう思わせるんじゃないでしょうか、皆さんの場合も。

美、というのはそういう力です。客観的に存在するんじゃない、でも誰もがそう感じるはずだ、という。客観的な裏付けがないにもかかわらず一人一人に確信させる、そういう力。客観的に存在する、というより、これは強いと思う。美というのはそういう力なんです。

で、僕は僕なりに、こういう文章はいい、誰が何といってもいい、という確信の蓄積をもっている。それが正しいかどうかわからないが、僕は自分でよく考えてみて、僕の最善を尽くして、^⑤ギンミの上、やはりこれがいい、と感じる、というものをもっている。だから、こういう文っていいんだよ、と言いたくて、こういう授業をやる。そう思うものがあるから、いろんな人が絵を描いたり、音楽を作ったり、文章を書いたりするんじゃないでしょうか。客観的な基準はない。思いこみ、気分だけしかない。しかし、^⑥それは単なる思いこみやない、それは思いこみだが、きつと他人もそう感じるはずだという、^⑦自乗化された確信、他者に開かれた確信、他者の契機を含んだ、そういう思いこみです。美はそういうものに支えられて存在し、また人に、そういうものを与える、^⑧焼きこいで。じゅーつと。

(加藤典洋『言語表現法講義』による)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5。

① コンキョ 1

① キヨマンの富を蓄える。

② キヨドウ不審な人物。

③ キヨエイ心が強い人。

④ バリケードをテツキョする。

⑤ 地域医療のキョテンとなる病院。

② ゲンミツ 2

① 事故の状況をサイゲンする。

② 医食ドウゲン。

③ 原料をゲンセンする。

④ ゲンカイ集落。

⑤ ゲンソウ小説。

③ コウレイ 3

① 小学生のときからのサッカーのコウテキシユ。

② コウキユウ平和を祈る。

③ コウガンの美少年。

④ キンコウが破れる。

⑤ 御コウセツを拝聴する。

④ テンサク 4

① テンガなロココ趣味の意匠。

② ウイテンペン^は世の常。

③ 不^ぐ俱^ぐタイテンの敵。

④ 集合場所でテンコをとる。

⑤ 防腐剤をテンカする。

⑤ ギンミ 5

① ゼンジンミ^{トウ}の快挙。

② キリスト教におけるサンミイツタイの思想。

③ ミウチの恥をさらす。

④ ムミカンソウなデータの一覧表。

⑤ 観客をミリョウする演技。

問2 傍線部(ア)「僕は断固として点数をつける」とあるが、この理由について述べた次の①～⑤の中から、最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 6。

① それぞれの美の基準を客観的に表現し、お互いに批評し合うことで真の基準が作られるから。

② 美と言う曖昧なものを批評するためには、一度点数という明確な形にする必要があるから。

③ 教育という行為には、熱意だけでなく自らの美の基準をもとにした絶対的な評価が欠かせないから。

④ 誰もが共有できる基準の存在を信じなければ、批評はもとより芸術自体が成り立たないから。

⑤ 自らの感動を正確に伝えるのが批評であり、揺るぎない明確な基準はその前提となるものだから。

問3 傍線部(イ)「いい」というのには、すでに他人が入っているんです」とあるが、その意味について述べた次の①～⑤の中から、最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 7。

- ① 自分自身の「いい」という感情が自分自身のものだとは確信できるためには、他人の「いい」との比較が必要だということ。
- ② 他人も「いい」と思うに違いないという確信がなければ、自分自身の「いい」という感情も生まれえないということ。
- ③ 自分自身の「いい」という感情には、他人の「いい」というものを勉強してきた蓄積が影響を与えているということ。
- ④ 「いい」という感情は、皆と共有することによって確信へと変化していくものだということ。
- ⑤ 自分自身の「いい」という感情は、他人が作り上げてきた評価の蓄積の土台の上に生まれるものだということ。

問4 傍線部(ウ)「それは」とあるが、ここで指示されているものについて述べた次の①～⑤の中から、最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 自分の中にある評価の基準。
- ② 自分の中にある創作態度の基準。
- ③ 自分と世間とで共有している基準。
- ④ 世間で流通している普遍的な基準。
- ⑤ 世間で通用する平易で客観的な基準。

問5 傍線部(エ)「自乗化された確信」とあるが、この意味について述べた次の①～⑤の中から、最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 「これがいい」という自分自身の理由のない確信に、他人との共感によって強化された確信が重なること。
- ② 「これがいい」という自分固有の感覚に対する確信に、他人も各々に固有の感覚で受けとめているという確信が重なること。
- ③ 「これがいい」という客観的な基準に基づいた確信に、自分独自の個性的な感覚で受けとめた確信が重なること。
- ④ 「これがいい」という批評家としての確信に、立場を抜きにした自由な感覚で受けとめた確信が重なること。
- ⑤ 「これがいい」という自分自身の確信に、それを他人と共有できるというもう一つの確信が重なること。

問6 傍線部(オ)「焼きこ」で、じゅーつと「とあるが、この言葉で表わしたかったことは何か。次の①～⑤の中から、最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 10。

- ① 美はその感動を人の心に、じっくりと時間をかけて、自然な形で浸透させる。
- ② 美はその感動を人の心に、一瞬にして、ずっと消えない形で深く刻みつける。
- ③ 美はその感動を人の心に、個人としての成長をうながしながら、広げていく。
- ④ 美はその感動を人の心に、痛みをとめないつつも、客観的なものとして記す。
- ⑤ 美はその感動を人の心に、圧倒的な力で、理性を混乱させながら植えつける。

問7 この文章の論旨に合っているものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 批評が最終的に目指すのは、芸術作品の客観的な評価基準の確立である。
- ② 芸術活動の根本には、感性において他者と理解しあえるという無条件の確信がある。
- ③ すぐれた授業には、すぐれた芸術作品と同じように人を感動させる何かがある。
- ④ 美の感動は、自分と異なる他者の感性との出会いの中から生まれる。
- ⑤ 美しいものを正しく見分ける力は、美に感動する経験の蓄積によって養われる。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。

江戸時代中期、江戸にいた杉田玄白は、オランダ語によって西洋の学術を研究しようと、加比丹^{*}が江戸に上った際には、彼の宿舎となっている長崎屋源右衛門の館に通っている。ここには他にも西洋の世界に興味を抱いている人たちが、加比丹と話をするために集まってくる。

彼は、中津侯の医官である前野良沢の名は、予て^{かね}から知っていた。そして、その^こ篤学^{とくがく}の評判に対しても、かなりの敬意を払っていた。が、親しく会ってみると、^①フシギに、この人に親しめなかった。

彼は、今までに五六度も、ここで良沢と一座した。去年加比丹が、この旅館に逗留^{とうりゅう}していた時にも、二度ばかり落ち合ったことがある。今年も月の二十日に、加比丹が、江戸に着いてから、今日で七日になる間、玄白は三四度も、良沢と一座した。

それでいて、彼はどうにもこの人に親しめなかった。それかといって、彼は良沢を嫌っているのでもなければ、憎んでいるのでもなかった。ただ、一座する毎^{ごと}に、彼は良沢から、妙な威圧を感じた。彼は、良沢と一座していると、良沢が居るといふ意識が、彼の神経にこびり付いて離れなかった。良沢の一挙一動が気になった。彼の一顰一笑^{いつびんいっしょう}が、気になった。彼が、気にしまいとすればするほど、気になって仕方なかった。

それなのに、相手の良沢が、自分のことなどは、ほとんど眼中に置いていないような態度を見ると、玄白は良沢に対する心持を、いよいよこじらせてしまわずにはいられなかった。

長崎表での蘭館^{らんかん}への出入は、常法があつて、かなり厳しく取締まられていたが、加比丹が、江戸に逗留中の旅宿である、この長崎屋への出入は、しばらくの間の事として、自然何の構もなき姿であつた。

従つて、阿蘭陀流^{おらんた}の医術、本草^{*}、物産^{*}、究理^{*}の学問に志ある者をはじめ、好事の旗本富商の輩までが毎日のように、押しかけていた。

ことに御医師の、野呂玄丈や、山形侯の医官安富寄碩、同藩の中川淳庵、蔵前の札差^{*}で、好事の名を取った青野長兵衛、讃岐侯の浪人平賀源内、御坊主の細井其庵、御儒者の大久保水湖などの顔が見えぬことは、稀^{まれ}だった。

そうした一座は、^②おぼつかない内通辞^{*}を通じて、加比丹にいろいろな質問をした。それが、大抵は阿蘭陀^{おらんた}の異風異俗についての、たわいもない愚問であることが多かった。加比丹の答に依つて、それが愚問であることが分ると、皆は腹を抱えて笑った。

また、ウエールガラス(晴雨計)や、テルモメートル(寒暖計)や、ドンドルガラス(震雷験器)などを、見せられると、彼等は、子供が珍しい玩具にでも、接したように欣^{よろこ}んで騒いだ。

が、こんな時、一座を冷然と見下すように坐っているのは良沢だった。彼は、みんなが発するような愚問は、決して発しなかった。彼は、初から終まで、冷笑とも微笑ともつかない薄笑いを、唇の端に浮べながら黙って聴いていた。

一座が、たわいもなく笑つても、彼のしつかりと、閉ざされた口は、容易にほころびなかった。

が、ある問題で、一座が問い疲れて、自然に静かになった頃に、良沢は定まって、一つ二つ問い質した。一座の者には、その質問の意味が、分らないことさえ多かつた。が、加比丹が、通辞から、その質問を受取ると、彼はいつも、駭いたように、目を刮りながら、急に真面目な態度になって、長々と答えるのが常だった。

一座の者は、良沢のそうした——彼一人高しとしているような態度を、少しも気にとめていないらしかったが、玄白だけはそれが、妙に気になつて仕方がなかつた。

つい、昨日もこんな事があつた。それはいつてみれば、何でもないことだが、加比丹のカルンスが、座興の為だったのだろう、小さな袋を取り出して、皆に示した。通辞は、加比丹の意を受けて、こんなことを云つた。

「カルンス殿のいわれるには、この袋の口を、試みに開けて御覧じませ。見事開けた方にこの袋を進ぜられるとあるのじや」
カルンスは、一面に髯の生えた顔のソウゴウを崩して、ニコニコ笑つていた。

一座は、かなり打ち興じた。一番に、細井其庵が、手に取り上げた。が、性急な彼は、しばらくいじつていたかと思うと、直ぐ投げ出してしまつた。

「どれどれ拙者が」と、安富寄碩が仔細らしく取り上げたが、これもしばらく考えていたかと思うと、思案に余つて投げ出してしまった。その袋は、一座の者の手から手へ渡つた。一人一人失敗する毎に、一座は声高く笑つた。カルンスは皆が開けかねているのを、嬉しそうに、ニコニコ見ている。

玄白の手もとに来たとき、彼もニコニコ笑いながら取り上げた。袋の口には、金具が付いていた。それは、おそらく知恵の輪の仕掛になつていたのでらう。玄白は、所々を押し引いたりしてみたが、口は一分も開かなかつた。

彼は、とうとう持て余した。彼は、苦笑しながら、それを次の者に譲ろうとした。が、その時に、一座の者は、大抵それを試みていた。ただ玄白の右手に、坐っている良沢だけには、彼が余り端然と控えているために、誰もそれを手渡しかねていた。

「前野氏、如何で御座る？」

玄白は、気軽にそれを良沢に、手渡そうとした。が、良沢は冷然として、それを受取ろうとはしなかつた。彼は、おそらく一座の者が、つまらな

い遊び物で、打ち興じていることが、余りに苦々しく思われたのだろう。否、[※]士大夫ともあるべきものが、つまらない遊び物で、加比丹から体よく^③ホンロウホーローされていることを苦々しく思ったのだろう。彼は、玄白が差し出したその袋を、見向きもしようとしなかった。

その袋は、玄白と良沢の中間に、置かれたまま、一座は一寸□^一いた。

が、丁度その時、折りよく平賀源内が、遅れて入って来た。彼は、その袋の事を、一座の者から聴くと、それを^④ムゾウサムゾウサに、取り上げたかと思うと、^⑤忽ち口を開けてしまった。

一座は、源内の奇才を賞する声で、充ち満ちた。彼の奇才は、一座の□^二のを救ったのである。

が、^⑥玄白の良沢に対する、意地とも反感とも付かぬ物は、彼の心の中で、この時からだんだん判然とした形を、取りかけていた。

玄白は、良沢が一座に居ると、心に思い浮ぶ質問の半分も、口に出すことが、出来なかつた。良沢には、自分の訊きいていることが、もうとつづく解つてはいはしないかなどと思うと、質問をすることが、良沢の前で、自分の無智むちを告白しているようで、どうにも気が進まなかつた。玄白は、そうした^⑦ガイブンガイブンとか見得とかといったような心持を、心の裡うちでかなり恥じていた。が、恥ながらも、それに拘泥こだわらずにはいられなかつた。彼は、阿蘭陀の事物、學術ことに医術に対する知識欲に渴えながら、妙な意地から、心のままに、質問することが出来なかつた。

(菊池寛「蘭学事始」による)

※加比丹……カピタン。江戸時代、長崎におけるオランダ商館長。物語りの頃は毎年三月、江戸に上つて將軍に拝謁し、品物を献上していた。

※本草……薬学。

※物産……有用な動植物や鉱物について研究する学問。

※究理……西洋物理学。

※札差……江戸時代、旗本、御家人の代理として米の受け取り、売りさばきの事務をつかさどっていた者。米を担保として金融業も行なっていた。

※内通辞……江戸時代、長崎貿易の通訳の一種。正規の通辞とは異なり、商品の取引の斡旋をして手数料を取っていた。

※士大夫……人格がすぐれ高い官職に就いている人。

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中から、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

① フシギ

- ① ギリと人情。
- ② 会社の方針についてギロンする。
- ③ 火事で多数のギセイ者が出る。
- ④ ケンギが晴れる。
- ⑤ モギ試験を受けてみる。

② ソウゴウ

- ① ラジコンの飛行機をソウジュウする。
- ② ワクチンが功をソウして病気が治る。
- ③ シンソウを究明する。
- ④ ソウダイな計画。
- ⑤ 冬山登山でソウナンする。

③ ホンロウ

- ① ロウせずして敵城を落とす。
- ② ベテラン選手のロウレンな駆け引き。
- ③ 砂上のロウカク。
- ④ ロウデンが火事の原因と考えられる。
- ⑤ 移民をグロウする言葉に怒りを覚える。

④ ムゾウサ

- ① 冠婚葬祭のレイギサホウ。
- ② 原子力発電所をササツする。
- ③ 大臣をホサする。
- ④ 学歴をサショウする。
- ⑤ 国境をフウサする。

⑤ ガイブン

- ① 裁判官をダンガイする。
- ② ショウガイにわたって医学を研究する。
- ③ 不公平な扱いにフンガイする。
- ④ 大事な会議に遅刻するなどロンガイだ。
- ⑤ 奨学生の条件にガイトウする。

問2 傍線部(ア)「篤学」、(イ)「おぼつかない」、(エ)「仔細らしく」の本文中の意味として、次の各群の①～⑤の中から最も適当なものを、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は、(ア)＝、(イ)＝、(エ)＝。

(ア) 篤学

- ① 学問を志す仲間を積極的に助けること ② 研究熱心で広く学問に通じていること ③ 多くの教養人と知り合いたいということ
④ 研究においては妥協しないということ ⑤ 超人的に頭の回転がはやいということ

(イ) おぼつかない

- ① 親切ではない ② 熱心ではない ③ 見慣れない ④ はっきりしない ⑤ 頼りない

(エ) 仔細らしく

- ① わかっているように ② おどけたように ③ 馬鹿にしたように ④ うさんくさそうに ⑤ 面白そうに

問3 傍線部(ウ)「彼一人高しとしているような態度」とは、良沢のどのような態度を指しているか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 。

- ① 一座の他のものに恥をかかせるようなことをして、自分ひとりだけ高い評価を得ようとする卑劣な態度。
② 一座のものをたちを馬鹿にしながらも、自分ひとりが得をするために利用できるところは利用しようという態度。
③ 一座のものをたちの知識の差が自ずと明らかになるような、高いレベルの問答を皆の前で遠慮なくする態度。
④ 一座のものは無邪気に楽しんでるのに、頼まれもしないのに勝手に教師のように教えようとする態度。
⑤ 一緒に勉強しようという一座のものをたちを出し抜いて、いちはやく自分だけ新しい知識を得ようとする態度。

問4 傍線部(オ)「彼が余り端然と控えているために、誰もそれを手渡しかねていた」とあるが、この状況についての次の①～⑤の説明の中から、最も適当なものの一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 良沢がまわりの軽薄な雰囲気あまりに馬鹿にしたように、澄まして座っているので、それに反感を持って誰も袋を気軽に渡せないでいた。
- ② 良沢がまわりのくだけた雰囲気あまりに違って、真面目にきちんと座っているので、それが何となく壁となって誰も気軽に袋を渡せないでいた。
- ③ 良沢がまわりの楽しそうな雰囲気からあまりに浮いて、傷ついたように淋しげにしているので、誰もが後ろめたくて気軽に袋を渡せないでいた。
- ④ 良沢がまわりの騒々しい雰囲気をあまりに無視していることから、心の中でもすごく怒っていることがわかるので、誰も恐くて気軽に袋を渡せないでいた。
- ⑤ 良沢がまわりのだらけた雰囲気をあまりに気にして、恥ずかしさに耐えるようにじっとしているので、誰もが恐縮して気軽に袋を渡せないでいた。

問5 空欄Ⅰ、空欄Ⅱにあてはまる語の組み合わせについて、次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 22。

- ① Ⅰ ゆるみかかって Ⅱ ゆるみかかる
- ② Ⅰ はじけかかって Ⅱ はじけかかる
- ③ Ⅰ 白けかかって Ⅱ 白けかかる
- ④ Ⅰ 締まりかかって Ⅱ 締まりかかる
- ⑤ Ⅰ 長くなりかかって Ⅱ 長くなりかかる

問6 傍線部(カ)「玄白の良沢に対する、意地とも反感とも付かぬ物は、彼の心の中で、この時からだんだん判然とした形を、取りかけていた」とあるが、玄白にとつて「この時」の体験はそれまでの体験とどのような点で違っていたのか。次の①～⑤の説明の中から最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 23。

- ① 一座のものたちの前で、良沢がわざと玄白に恥をかかせるような振る舞いをしたという点。
- ② 良沢が一座のものたちだけでなく、唯一話し相手だった加比丹に対しても心を閉ざしてしまった点。
- ③ 一座のものたちが賞賛する平賀源内を、良沢が自分のライバルとしては認めようとしなかった点。
- ④ 良沢が周りの空気を読もうとせず、自分の利益になることだけにしか興味関心がない点。
- ⑤ 良沢が心を開こうとせず、プライド高い自分を変える気がないことが明らかになった点。

問7 本文の構成や表現に関する説明として、最も適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 登場人物それぞれの内面を均等にのぞく形で、客観的に人間関係を描いている。
- ② 作者の想像を最小限に抑え、江戸時代の人々の考え方が正確に伝わるように描いている。
- ③ 語り手は玄白に寄り添い、玄白の良沢に対する心理的わだかまりに焦点をあてて描いている。
- ④ 西洋の新しい学問を志す人々の知的な熱気を、個性豊かな青春群像の形で描いている。
- ⑤ 人間心理の微妙なあやを、比喩表現を多用しながら象徴的に描いている。